

10月25日（日）主日礼拝レジュメ

「時を刻むということ」 伝道者の書3章1節

ジョーンズという人が、「この個所は大いなる美と詩の一つであるが、厄介なのは抗議の箇所である。（中略）その抗議の核心的な部分は、伝道者がこの時間の連続の中に投獄されていると感じているということ、そして、なぜかは分からないが、これは彼が切り抜けなければならないことであるがゆえに反抗しているということである」

H.L. ギンスベルグも、伝道者を運命論者とみなして、その硬直した運命予定論が満ち足りた人生を探究することを妨げていると言った。

ウェインは、伝道者は、神を絶対的で専制的な運命の主人であるとみなしているのであると言った。

ジェームス・バーは、「全体の目的は、神が出来事をあらかじめ設定しておいたからなのかほかの理由によるのかは別にして、人間の生活と労働に及ぼす時間の失望的な影響を強調することであるのは明らかである」と言っている。

11節では、人生の大きな出来事は神の配剤のもとにあると同時に、人間の不完全さや無力さのゆえに、それらを見極めることができないと言う。出来事も、時期も、すべて神が人間に課されたもので、特に一人ひとりに神が与えたものだ。

キドナーは、「私たちがどんな才能を持っていたとしても、また人生にどんな意図があったとしても、私たちの本当の主人は、これらの容赦なき時であるように見える。暦の上の季節だけではなく、自分たちを適切に思える行動に動かし、次にそれを全く逆にする他の行為に動かすような出来事の流れて

ある。」と言った。要は、ここで言われていることについては、自分の意志や願いなどによって、時をどうすることもできないということ。私たちは時というものに支配され、時の中でしか生きられないことを日々実感していることだろう。そして自分に与えられている時がどれだけなのかは分からないにもかかわらず、常に人生のタイムテーブルを設定しようとする。しかし自分の時がどれだけなのかということは誰にも分からないし、明日自分がどうなるかさえ分からない。普段私たちは時を意識しないが、実際には時とか時期というものの支配の中ですべての人が生きて、行動している。

ヤコブの手紙4章13～15節『「今日か明日、これこれの町に行き、そこに一年いて、商売をしてもうけよう』と言っている者たち、よく聞きなさい。あなたがたには、明日のことは分かりません。あなたがたのいのちとは、どのようなものでしょうか。あなたがたは、しばらくの間現れて、それで消えてしまう霧です。あなたがたはむしろ、「主のみこころであれば、私たちは生きて、このこと、あるいは、あのことをしよう」と言うべきです。』

これこそが私たちの時の概念であるべき。まず一つ私たちが教えられることは、一日一日が私たちに与えられていることは決して当たり前のことではないということ。自分があたかも時を支配するかのように、自分の時も、自分の計画も、自分の人生も、すべてが自分の思い通りにいくかのように考えて生きることは、どうなのだろうか。

感謝をもって一日を始め、感謝をもって一日を閉じる、このような生き方を私たちもしてまいりたい。このような生き方は、すべての人に神が平等に与えてくださっている一日において、自分がすべきことをなし、自分がしたいことをし、そのような中で感謝をもって一日を始めて、一日を閉じることは、決して窮屈な牢屋に閉じ込められている不自由さを味わうということはないはず。

私たちは時をも支配し、私たちの人生も、そして私たちのいのちを支配しておられる天地万物の創造主である神を知っている。私たちは、この神にすべてをゆだねて生きることのできる幸いを知っている。

星野富弘氏の詩に「生きていると思っていた時には 生きるのが苦しかった。生かされていると思うと 生きるのが楽になった」という詩がある。神にゆだねれば、できないことも、神が補ってくださる、助けてくださると信じて、すべてをゆだねて、明日の一日へ向えます。そのように時を刻み、一日一日を生きることのできる幸いを知っていただきたい。

「どうか教えてください。自分の日を数えることを。そして私たちに 知恵の心を得させてください。」（詩篇 90 篇 12 節）